

法として、Act-D MTX, Endoxan 三剤同時併用療法を行った場合と、免疫療法として、OK432を併用した場合とを比較すると、尿中 HCG 値に関しては、OK432 併用効果はみられなかったが、副作用としての白血球減少に関しては、効果がみられた。

## 28. 当科における絨腫治療成績

高見沢裕吉, 工藤純孝 (千大)

絨腫, 破奇 204 例 (1956~1975年) の年代別治療法別生存率および奇胎 411 例 (1974~1975年) の管理成績を述べる。破奇の生存率は転移例 68.8%, 非転移例 90.9% より MTX, Act の使用で両者 100% に、絨腫のそれは転移 13%, 非転移 43% より 35%, 86% も上昇した。又 high risk 症例には MTX, Act-D, Chlorambucil 三剤同時併用により 2/3 の症例に寛解をみた。奇胎後の症例は尿 hCG にてチェック 9.8% の治療を行った。絨腫の発生はみない。

## 29. 子宮頸部 I<sub>1</sub> 期癌の術前診断スコア

武田祥子, 森川真一 (千葉市立)

子宮癌の集団検診普及により、頸部初期浸潤癌の数が増加したので、この手術法を術前検査でいかに決定するのが妥当かを研究した。細胞診, 組織診, コルポ診の所見の重さに比例して、段階的に 1, 2, 3, 4 点を与え、これを加算して診断に供した。その結果 8 点以上は 3 mm 以上の浸潤癌, 6 点以下では 93.1% の確率で 3 mm 以下の浸潤癌を推定可能であった。overtreatment を最小にし undertreatment を 0 にするため本法が有効である事がわかった。

## 30. コルポスコープにおけるトリアス像の解析

竜 良 方

基底 19 例, 分野 30 例, 白斑 40 例について形態学的に細分類し、同部位のパンチ組織診と対比した。基底の血管像により (1) 球状型, (2) ヘアピン型, (3) 巣状型, (4) 混合型とした。分野のモザイク構造により (1) 完全型, (2) 不全型, (3) 分離型, (4) 点状移行型, (5) 点状型とした。白斑の大きさにより点型と面型とした。

基底は巣状型に悪性率が 83% であった。分野は完全, 不全, 分離型には 50~66% は化生上皮で, 点状移行型には上皮内癌が 62% 比較的高率に示し, 点状型には悪性のものがなかった。白斑は点型, 面型とも良性悪性のものを認め, 点型には上皮内癌が割合に多い傾向を示す。

三者について濁白性, 隆起を示すものは悪性率が高く, 白斑はさらに硬度 (+) または透明度 (-) の所見を加えたものに悪性の傾向を増す。これらはトリアスの良悪性の重要な参考所見と判明した。

## 31. 検診車で検出された異型上皮の追跡成績

望 月 博

過去 4 年間検診車にて集団検診を行った 15 万名中より組織診にて異型上皮と診断された 292 名のうち follow up を施行した 197 例について検討を加えた。初回精検時に異型上皮と診断された良性的に変化したものは 116 名で 58.9%, 異型上皮にとどまっているもの 28 名で 14.2%, 上皮内癌の発見されたもの 42 名で 21.3%, 侵入癌の発見されたもの 11 名で 5.6% であった。悪性病変の発見されたものは 85% が 1 年以内に診断された。

## 32. 子宮頸癌術式別各種障害について

高 野 昇

選択術式別術後経過における各種障害を検討し、子宮頸癌患者術式選択にあたっての今後の指針とした。

最近 2 年間に 175 例の子宮頸癌患者の手術を行った。その結果、術前術後 (半年~1 年) における排尿障害の実際と泌尿器学的検索結果との相関を明らかにし、術式選択また術後障害の予防の一助とすることができた。また術後の生活実態調査結果から術前, 術後における生活指導の必要性を認めた。

## 33. 子宮頸癌に対する手術療法と放射線療法

阪口禎男 (千大)

1959 年から 1975 年迄の 17 年間に当教室および放医研で入院治療した患者は 3054 例であったが、その中 1970 年迄の 2128 例についての 5 年治癒率は 59.8% であった。手術療法によるものは 79.2%, 放射線療法によるもの 45.2% であった。術後障害のうち手術療法では広汎性子宮全摘出術を行って尿瘻が発生した症例は 1970 年以後は減少した。また、放射線療法では高線量率腔内照射に切り換えてから、低線量率腔内照射に比し、膀胱, 直腸, 子宮腔部への障害が急減した。

## 34. 腔原発初期癌

山内一弘 (癌研)

腔癌は、婦人性器悪性腫瘍において、1~3% を占めるにすぎない、非常に稀な疾患である。当科において、最近 4 例の腔原発初期癌を経験した。その細胞診像は、